The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	A PROFILE ANALYSIS OF PERSONALITY DISORDERS : BEYOND MULTIPLE DIAGNOSES
Author(s)	中尾, 和久
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42964
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【 35 】

氏　　名	中尾和久（なかお かずひさ）
博士の専攻分野の名称	博　士（医　学）
学位記番号	第　14832　号
学位授与年月日	平成11年5月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	A PROFILE ANALYSIS OF PERSONALITY DISORDERS : BEYOND MULTIPLE DIAGNOSES （人格障害のプロフィール分析：重複診断を超えて）
論文審査委員	（主査） 教授　武田　雅俊 （副査） 教授　杉田　義郎　　教授　森本　兼曩

論文内容の要旨

［目的］

人格障害診断における重複診断問題を克服するために、人格障害を有する患者がどのようなクラスターに分かれるか、ならびに、人格障害を有する患者を分類する次元は何かを明らかにする。

［方法ならびに成績］

人格の病理を有する、非器質性、非精神病性の精神科外来患者59名（男性25名、女性34名、平均年齢29±10歳）について、DSM-III-R の人格障害の診断基準を評価し、個々の人格障害ごとに満たした診断基準の数を算出し、これに基づいてクラスター分類をおこなった。また、多次元尺度法により、患者を分類する次元を抽出した。

その結果、クラスター分類では、分離的（detached）、強迫的（anankastic）、恐怖症的（phobic）、劇的（dramatic）、突飛（erratic）、感情的（emotional）、軽症感情的（milder emotional）、被虐拒絶的（masochistic negativistic）の、8つの群に分かれた。

分離的な群では、分裂病質、分裂病型、回避性、妄想性の人格障害が高かった。重症対人恐怖はこの群に属し、全般的な機能は、8群の中で最も低かった。強迫的な群では、強迫性と回避性の人格障害が高かった。恐怖症的な群では、回避性と依存性の人格障害が高かった。対人恐怖（社会恐怖の全般型）や、二重うつ病（double depression）を有する気分変調症が、この群でみられた。劇的群では、自己愛性と演技性の人格障害が高かった。この群は、全般的な機能が最も高かった。突飛群では、境界性、妄想性、自己愛性、分裂病型、演技性の人格障害が高かった。感情的群では、境界性、回避性、依存性、自己敗北性の人格障害が高かった。この群は、全例女性であり、気分変調症、対人恐怖（社会恐怖の全般型）、アルコール乱用が、この群でみられた。軽症感情的群では、境界性、演技性、依存性、受動攻撃性の人格障害が高かった。80％が女性で、二重うつ病を有する気分変調症や解離性障害が、この群でみられた。被虐拒絶的群では、受動攻撃性と自己敗北性の人格障害が高かった。

この様に、1つのクラスターは複数の人格障害からなり、また、1つの人格障害は複数のクラスターにおいてみられるため、現在のカテゴリー診断では重複診断が避けられない。したがって、無用の重複診断を避けるには、人格障

害診断に階層化を導入するか、人格障害のプロフィールに基づいて診断をおこなう必要があることが明らかになった。

次に、多次元尺度法では、不安反芻（anxious rumination）対行動化（behavioral acting out）の次元、人格病理の重症度の次元、自己主張対引きこもりの次元の、3次元が抽出された。このうち、不安反芻対行動化の次元と自己主張対引きこもりの次元は先行研究に合致する知見であり、今回、人格病理の重症度の次元が、新たに実証的に抽出された。

この人格病理の重症度の次元は次の3つの意味を持つ。第1に、人格障害のプロフィールは、人格病理の重症度と関連する。第2に、もし、先に述べた人格障害診断の階層化を導入するならば、この重症度の次元に基づいて、階層を決めることができる。第3に、重症な人格障害は、正常人格とは連続していない可能性を残す。

[総括]

人格の病理を有する、非器質性、非精神病性の精神科外来患者について、人格障害のプロフィール分析をおこない、また、個々の患者を分類する次元を抽出した。その結果、分離的、強迫的、恐怖症的、劇的、突飛、感情的、軽症感情的、被虐拒絶的の、8つの群に分かれ、不安反芻対行動化の次元、人格病理の重症度の次元、自己主張対引きこもりの次元の、3次元が抽出された。

以上より、現在のカテゴリー診断では重複診断が避けられず、無用の重複診断を避けるには、人格障害診断に階層化を導入するか、人格障害のプロフィールに基づいて診断をおこなう必要があることが明らかになった。また、そのいずれの場合にも、今回実証的に抽出された人格病理の重症度の次元を評価すべきであると考えられた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、人格障害をプロフィールに基づいて検討したものである。人格障害診断における重複診断ついては、統一された見解は得られておらず、未だ多くの議論がある。本論文では、計量精神病理学的方法を用いて、人格障害の基本的な類型と分類基準を提示し、重複診断の由来と解決法を論証している。この類型と分類基準は、人格障害診断に関する臨床と研究の乖離を解消し、精神療法的対応をふまえた治療方針の確立にも資する臨床的に有用なものと考えられ、学位に値するものと認める。